



防人歌の言霊

小川眞一

防人歌の言霊

小川眞一

1. はじめに

万葉集には約百首の防人歌が編集されている。これら防人歌の選者は、大伴家持である。天平勝宝 7 年（755 年）、当時の兵部少輔であった大友家持が、諸国の都領士（防人引率の国庁の役人）に命じ防人たちと近親者が進上した歌から取捨して採録したものである。防人は、国土防衛のために特に九州地方の防衛のために全国から集められた。特に東国から徴集したの防人が中心であった。戦前では、「海ゆかば・・・」という家持の歌が、特攻隊の兵士たちに歌われた。軍部に悪用されたため評判が悪い。しかし許容した政治体制の問題のために万葉集の防人歌が劣悪であるということにはならない。天平当時の歌を、現在の反戦平和運動の観点から評価することは筋違いである。兵士たち、家族たちの不安を鎮める鎮魂歌でもあったことや家持の境遇と選歌の深奥の心情を素直に評価する必要がある。善悪に関わらず古来日本人は組織のために犠牲になることを厭わない心情があった。特に、男性は、生きるための糧を得る「戦い」が役割であった。防人は、現代日本でいうと常に危険と隣り合わせで地域社会の安全を守る職務に従事する自衛官・警察官・消防官（消防団員）・海上保安官などであろうか？

防人の歌の大部分は、生存の原点としての家郷から切り離された苦悩、原点への回帰の願望、家族への思い、将来への不安・恐怖などが生々しく歌われている。

古代では万葉集に「言霊の幸ふ国」とか「日本国は言霊の祐くる国」とあるように、言葉には霊力があって一種霊妙な動きをなすものとされていた。防人歌は、大君（おおきみ）への忠誠心を高揚するような歌もあるが多くは故郷への心を表現したものであった。拒絶できない天命によって家族から引き離され、異郷への旅を余儀なくされる防人たちの不安が率直な表現によってうたわれている。家人への思いを歌うことは、一方では行旅の無事を祈る家人の呪力を喚び起すことにつながる。これらの歌に旅の不安を鎮める意味もあった。また、当時は、「言立て」という誓いの言葉により敵に後ろを見せない勇猛さを表現する儀式のようなものがあった。家持の丈夫（ますらお）意識から防人への鼓舞と期待を前面に出した歌も好まれ選ばれている。

兵部少輔であった大友家持は、古来の名族大伴氏の嫡流でありながら、藤原氏の圧倒的な勢威のため政治的には概ね不遇な生涯を送った。大伴家持は、天皇を敬愛する大伴氏の極めて純粋な精神の持ち主であった。家持は、防人を筑紫に送り出すために難波津に滞在した一ヶ月ほどの間に、防人から提出された歌を編集して歌日記に書きとどめ、自身も防人を歌った歌を作った。家持は東国からやってきた防人たちの、飾らない歌いぶりに感動し自身を防人の身に事寄せて、その気持をくみ上げようとした。防人たちの赤裸々な

歌に目を通し自分も防人の心情を歌い込もうとしたと思われる。家持は、彼の人生の中でもっとも輝いていたと思われる越中国守時代に、多くの有名な歌を残しているが、防人歌は家持の流麗な歌とは異なるもう一つの顔―兵部少輔から覗いた防人たちの心の叫びを集めた鎮魂歌として編纂されている。古代において防人とはどんな人たちだったのか、万葉集における歌は防人たちの呪力をもった言霊として表現されたものであったのだろうか？防人たちの召集官であった大伴家持がいかなる心境で防人たちの歌をとらえたか？藤原氏の権勢の高まりと陰謀のなかで滅びゆく大伴氏の惣領として滅びの精神を感じながら防人たちの歌を選ぶ心境はいかなるものであったのだろうか。上代の天皇は平安以降の貴族・公家的存在ではなく自ら戦う武人であった。天皇を中心とした若い国家が大陸や朝鮮半島からの強い軍事的、文化的影響を受けながら生きた古代人の心のなかを歌を通じて探ってみたい。

目次

はじめに

第1章 防人とは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

1. 防人制度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

2. 武人としての天皇の時代・・・・・・・・・・・・・・ 5

第2章 防人歌とは

1. 防人歌・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

2. 家持の防人への愛情・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8

第3章 大伴家持の人生と和歌・・・・・・・・・・・・・・ 13

第4章 歌の呪力

1. 言霊・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15

2. 鎮魂の呪力・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17

3. 歌は打つ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18

4. 贈答歌・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19

5. 神話について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19

6. 言霊のトランス・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21

7. 怨霊の時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21

第5章 萬葉集の精神—滅びの精神

1. 軍歌か鎮魂歌か・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22

2. 大伴家持の覚悟と安田與重郎の滅びの精神・・・・・・・・・・・・・・ 23

3. 安田のイロニー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23

第6章 終わりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25

巻末： 万葉集 防人歌全集

参考文献

第1章 防人とは

1. 防人制度

防人は大化2年(646)の詔で始められ延暦11年(792)廃止された日本古代兵制の一つである。任期は3年、本来、諸国から集められたが奈良時代中期ごろからは、東国諸国の軍団の兵士の中から選ばれた。主として勇敢なるゆえであったといわれる。

唐の「辺要置 防人為鎮守」を真似て、九州太宰府に防人司が設置された。欽明天皇の、弘安十年(1287)ごろから約六百年間続いた制度であった。語源は「埼守(さきもり)」である。防人制度は、5つの時期に分かれている。

①斉明天皇の時、百済を救援するため日本兵二万七千人が動員されたが、天智二年(663)白村江の戦で大敗し、大部分の兵が唐の捕虜になった。この時の兵は多くは九州出身者であった。

②天智三年(664)唐・新羅に備え、対馬・壱岐・筑紫に防人と烽(のろし)とを置き、筑紫に水城(みづき)を築くことになった。防人は諸国から集められた。二十一歳から六十歳の男子で、三年間の勤務。

③天平二年(730)諸国の防人を国に帰し、専ら東国から派遣することになった。兵士逃亡と疫病による社会不安を収めるためと考えられる。しかし、疫病が各地で頻発し、農村の労働力不足が深刻化し、天平九年(737)東国の防人も故郷に帰された。

④天平勝宝七年(755)防人制度が復活し、東国の農民が筑紫へ派遣された。この防人もやがて廃止された。防人の通過する国々の負担が大きいため各地から不満が出たためと考えられる。仲麿政権は天平宝字元年(757)東国の防人から西国の兵士に代えた。

⑤ 757年以降は九州からの徴用となった。奈良時代末期の792年に桓武天皇が健児の制を成立させて、軍団・兵士が廃止されても、国土防衛のため兵士の質よりも数を重視した朝廷は防人廃止を先送りした。8世紀の末から10世紀の初めにかけて、しばしば新羅の海賊が九州を襲った(新羅の入寇)。弘仁の入寇の後には、人員が増強されただけではなく一旦廃止されていた弩を復活して、貞観、寛平の入寇に対応した。

上代の日本列島の東と西には、大きな文化的断絶していた。独自の言語圏も形成されていた。東国(アヅマ)は都と鄙の対立構造から除外された第三の地域すなわち異域であった。万葉集では、東国を鄙と呼ぶことはない。東国は中央への帰順が遅れ、天皇の版図とは別に扱うべき異域であった。中央の側は、東国の異域性を一種のエキゾチシズム(異国趣味)として感じていたようである。防人の兵数は2千人とも3千人ともいわれる。毎年千人づつが交代した。防人の階層は、国造(くにのみやつこ)―助丁(すけのよぼろ)―主張丁(しゅちようのよぼろ)―火長―上丁(かみつぼろ)―防人という序列があり地方の身分差を反映していた。上層部は地方豪族がいたが、最下級の防人は一般農民であった。対朝鮮半島政策として最前線の防備を役づけられた。防人は肉親、妻子の同行は許されてなかったが、それ以外の従者を伴うことはできた。旅中行き還りの衣食や着任先の衣食はすべて自ら調達しなければならなかった。東国諸国でもしかるべき資産財力を持つ者のなかから選ばれていた。しかし、

その間も税は免除される事はないため、農民にとっては重い負担であり、兵士の士気は低かったと考えられている。徴集された防人は、九州まで係の者が同行して連れて行かれたが、任務が終わって帰郷する際は付き添いも無く、途中で野垂れ死にする者も少なくなかった。

2. 武人としての天皇の時代

上代の天皇の様相は平安時代以降の天皇とはかなり異なるものであった。古事記は、スサノオノミコトの荒々しい行いや出雲の国譲り伝説におけるタケイカズチノカミの威力、ヤマトタケルの東征、神武天皇の東征など戦の物語が多い。飛鳥時代においても同様天皇とは武人であり一軍の将であった。天智天皇は、中大兄皇子時代に自ら剣をふるって蘇我入鹿を殺している。その弟の天武天皇は槍の名人で自ら壬申の乱の総大将として戦っている。「和を以て貴しとなす」の聖徳太子でさえ若き頃に物部氏との戦いに従軍している。しかし、奈良から平安時代に入ると天皇が自ら剣をふるうどころか、武装（帯剣）すらなくなる。天皇だけでなくそれを取り巻く貴族も同じく平研（軍事権）は実質上武士という新興階級の握るところとなった。武士は本来国家の正式制度（律令）とは無縁の存在であったが、平安律令国家は、軍事権を放棄し検非違使から武士の手に委譲させ鎌倉幕府の成立につながっていった。

武とは戈（ほこ）と止めるという字を組み合わされたものである。[常用字解] 戈（ほこ）を持って攻撃してきた敵と戦うが本来は攻撃的な意味ではない。しかし勇気を重んじるますらお精神に繋がっている。武の道具である剣は八咫鏡、八坂の勾玉とともに歴代天皇が三種の神器として受け継がれている。古事記にある草薙の剣はスサノオノミコトが八岐大蛇を退治したときその尾から出た剣で天の叢雲剣と呼ばれた。この剣はスサノオノミコトから天照大神に献上され伊勢神宮に祀られたが、景行天皇の皇子、日本武尊が東国の平定に向かう途中伊勢の神宮で譲り受ける。尾張の国に向かったヤマトタケル（日本武尊）は、国造りのミヤズヒメと婚約し東征する。途中敵にはかられ火に囲まれて危うくなったが神剣によって周りの草を薙ぎ払い、向かい火をして難を逃れた。この由来により草薙の剣と名付けられた。数々の試練を乗り越え東征後ミヤズヒメと結婚するが伊吹山の荒ぶる神を平定するため神剣をミヤズヒメのもとに置いたまま出かけてしまう。ヤマトタケルは、山の神に幻惑されて病にかかり亡くなる。ミヤズヒメは遺志を重んじ熱田の地に神剣を祀った。また、熱田神宮の創祀である。八咫鏡、八坂の勾玉とともに歴代天皇が高位のしるしとして受け継がれている。熱田神宮は武家の神としても特別の崇敬を受けている。中世には源頼朝の母が熱田大宮司の娘であったことから頼朝が崇敬を深めている。以後も武家の信仰をあつめ足利、織田、豊臣、徳川などが社殿の造営に努めている。

皇室には数々の祭りがある。天皇は日々皇室祭祀を執行し祖先と神々に感謝し、国家の安泰、国民の福祉、世界の平安を祈願している。親祭の伊勢神宮のみならず各地の神社で恒例の祭りが行われる。全国に16社があるがこのうち武の神である鹿島神宮と香取神宮には6年ごとの例祭に勅使を派遣している。三種の神器の一つは剣であり、熱田神宮には、草薙の

剣がご神体として祀られており武家の神としても特別の崇敬を受け源頼朝、足利、織田、豊臣、徳川から社殿の造営を寄進されている。

防人制度は、防衛のための兵制であったが、後世の植民地侵略、富国強兵、革命戦争のための軍事制度とは意図が異なっている。朝鮮半島における不安定な対立の影響もあり国家統一が不安定な時代であった。蘇我氏、物部氏の権力闘争のあと藤原氏による横暴・陰謀が始まり橘氏、大伴氏の衰退が始まっていた時代であった。

第2章 防人歌とは

防人歌は、対馬・壱岐など九州辺境の防衛のために東国諸国から徴発された防人やその妻たちの歌を指す。防人歌は万葉集巻20に84種あるが755年、防人を召集する担当の兵部少輔であった大友家持が、諸国の都領士（防人引率の国庁の役人）へ進上した歌を取捨して採録した。防人たちが各地方から難波に集結してくると彼らに歌を詠進させた。母と別れ、父と別れ、妻と別れる防人からの叙述的な歌が多い。

1. 防人歌

代表的な防人歌をあげる。

「今日よりは顧みなくて大君の醜（しこ）の御楯（みたて）と出でたつ我は」

（今日からは後ろを顧みることもなく大君のつたない御楯の端として出発する。この我は）
4373：今奉部与曾布

大君の先兵として異域に出陣する覚悟を詠った下士官根性の勇壮な歌であるが、複雑な翳りも感じられる。

「ふたほがみ悪しけ人なりあた病我がするときに防人にさす」

（ふたほがみ（未詳）は悪い人だ。急な病に私が罹っているときに、防人に任命するとは）
4382：大伴部廣成

病気の自分を防人に指名したことへのつよい不満をぶつけている。防人に任じられたことを運命的なものとして受け入れているなかで直接的な抵抗の意識を示している。

「畏きや命被り（みことかかふ）明日ゆりや草（かえ）がむた寝む妹（いむ）なしにして」

（畏れ多いご命令を頂いて明日からは草と共寝をするのだろうか。妻もいないままに）
4321：物部秋持

{大君の命畏み（みことかしこみ）磯に触（ふ）り海原（うのはら）渡る父母を置きて}

（大君のご命令を畏れ慎んで、危険な磯伝いに海原を渡っていく。父母を残して。）
4328：丈部人麻呂

障（さ）へなえぬ命（命）にあれば愛（かな）し妹（いも）が手枕（たまくら）離れあや

に悲しも

(拒絶できないご命令であるので、いとし妻の手枕を振り切りやっではきたが、むしように悲しいことだ)) 4432: (不明)

大君(おおきみ)への忠誠心を高揚するような歌もあるが多くは故郷への心を向けたものであった。拒絶できない天命によって家族から引き離され、異郷への旅を余儀なくされる防人たちの不安が率直な表現によってうたわれている。家人への思いを歌うことは、一方では行旅の無事を祈る家人の呪力を喚び起すことにつながることから、これらの歌に旅の不安を鎮める意味もあった。

「我(わ)ろ旅は旅と思(おも)ほど家(いひ)にして子持(め)ち瘦(や)すらむ我が妻愛(みかな)しも」

(私は旅の空で気晴らしもあるだろうが 家にいて子を抱えて気苦労な暮らしで痩せている 妻が愛しく気懸かりなこと) 4343: (玉作部廣目)

防人歌のなかには妻たちの歌もある。

「草枕旅の丸寝の紐絶えば我が手と着けろこれの針持し」

(草を枕の旅の丸寝の紐がとれたら、私の手とおもって縫いつけてください。)

4420: 棕椅部弟女

男女が別れに際し、互いの下着の紐を結びあい、それぞれの魂を封じ込めた。無事な再開を祈るための呪術である。

「防人に行くは誰(た)が夫(せ)と問ふ人を見るが羨(とも)しき物思ひもせず」

(防人に出ていくのは誰の夫かね)と尋ねている人がいるのがうらやましい。なんの物思いもしないで。) 4425: (不明)

自分の心と他人の心と引き裂かれた防人の妻の立場をリアルに歌っている。防人の妻の非凡な歌才と直截的なことば運びが的確な状況を写し、自然な迫力を生んで人の心を打つ。

生存の原点としての家郷から切り離された苦悩、原点への回帰の願望、家族への思い、また家郷から引き裂かれる将来への不安・恐怖などが生々しく歌われている。防人の家族の歌も夫を送り出さざるをえない妻の深く重い苦しみが詠出されている。総じて防人歌には、貴族の旅の歌とは同列に論じられない、生存の危機に立ち至った者の叫びが歌われている。

韓衣(からころも)裾に取り付きなく子等を置きてそ来ぬや母(おも)なしにして

(韓衣の裾に取り付き泣く子を分離するように置いてきてしまったことよ、母もない子なのに)

防人のうたには故郷に後ろ髪を引かれる思いをよんだものが多い。

「父母が頭（かしら）搔き撫で幸（さ）くあれて言ひし言葉（けとば）ぜ忘れかねつる」
（父母が出発前に私の頭を撫でながら、無事であるようにと祈ってくれた言葉が忘れられないことだ） 4346: 丈部稲麻呂

「葦垣（あしかき）の隅処（くまと）に立ちて我妹子が袖もしほほに泣きしそ思はゆ」
（門出の時 葦の垣根の隅に立って袖を濡らして泣いていた 可愛いあの子が忘れられない） 4357: 刑部千國

当時防人としてでかけるのはよほどの困難が予想されたくらく任地から無事に帰国することは至難なことであつたらしい。悲しい妻との別れの瞬間があつた。

2. 家持の防人歌

これら防人歌に心を痛めた家持の歌がある。大伴家持は、天孫降臨に供奉した天忍日命（アメノオシヒノミコト）より伝わる武人の名門・大伴氏に生まれ、若くして一族の長（おさ）となった。大伴氏は代々、大君（おおきみ）すなわち天皇を守護する近衛兵としての役割を担っていた。家持は、その誉れある職務に、一人の丈夫として強い使命感を持ち、大きな誇りを感じていた。兵部少輔大伴宿禰家持は、天皇を敬愛し、天皇のために働き、天皇のために死んでいくことも厭わない、極めて純粋な精神の持ち主であつた。家持は、その誉れある職務に、一人の丈夫として強い使命感を持ち、大きな誇りを感じていた。いわば軍人である。有名な「海行かば」の歌に彼の大丈夫ぶりと武士（もののふ）の壮絶な覚悟が示されている。

海行（うみゆ）かば 水漬（みづ）く屍（かばね）山行（やまゆ）かば 草生（くさむ）す屍 大君（おおきみ）の 辺（へ）にこそ死なめ かへりみはせじ

（海を行けば、水に漬かった屍（しかばね）となり、山を行けば、草の生（はえ）る屍となつて、大君のお足元に死のう。決して後ろを振り返ることはするまい。）

大伴家持は、防人を筑紫に送り出すために難波津に滞在した一ヶ月ほどの間に、防人から提出された歌を編集して歌日記に書いて選歌した。大君のために死すべき自己の境遇を受け入れ、その生き方に誉れさえ感じていた家持であつたが、防人たちの歌を読むことで、他国の侵攻を防ぐために、その盾（たて）となって死ぬべき運命にあつた彼らの悲痛な叫びに接し、強い衝撃を受けていた。大君を守る武人であつた家持は、他国の侵攻から御国を守る防人たちの中に自己を見出した。防人たちは、言はば、家持の分身でもあつた。防人たちの苦しみは、そのまま家持自身の苦しみでもあつた。防人たち悲壮な心持ちが、そのまま我がこのように感じられたのである。

防人たちの歌を詠みつつ彼らの非別の歌に情を動かし3組の長歌を残している。家持は

東国からやってきた防人たちの、飾らない歌いぶりに感動し、自身を防人の身に事寄せて、その気持をくみ上げようとする気持が表されている。(巻20)

A「防人が悲別の心を追ひて傷み作る歌」(4331~4333 および短歌 4334~4336)

B「防人が情のために思いを陳べて作る歌併せて短歌 (4398~4400)」

C「防人が非別の情を陳べる歌一首併せて短歌 (4408~4412)

を残している。大君に尽くす敢闘者としての立場と防人の残された家族への悲しみの思い・同情が複雑に交差しているように感じられる歌である。それぞれの歌の比較をしてみたい。

まず一首目の歌である。大丈夫ぶりが強く出されている。官人としての立場から、防人への鼓舞と期待が前面に出されており、防人たちとの立ち位置は異なっている。

4 3 3 1 「防人が悲別の心を追ひて傷み作る歌」 大伴家持

大君の 遠の朝廷 (とほのみかど) と

しらぬひ 筑紫の国は 敵 (あた) 守る (敵の来襲を見守る)

おさへの城ぞと (抑えの城だと) 聞こし食す (大君のお治めになる)

四方の国には人さはに (あまたの人は) 満ちてはあれど 鶏が鳴く

東男は 出で向ひ (敵に向かって) かへり見せず (わが身を顧みず)

勇みたる 猛き軍士 (いくさ) とねぎたまひ (詔され)

任せ (まけ) のまにまに (仰せのままに従軍する)

たらちねの母が目離れて (別れて) 若草の妻をも巻かず

あらたまの 月日数 (よ) みつつ (月日を数えて) 葦が散る

難波の御津に 大船 (おほぶね) に ま櫓しじ貫き (まかいしじぬき)

朝なぎに 水手 (かこ) ととのへ (かこを揃え)

夕潮に 楫 (かじ) 引き折り (梶を引き折れよとばかりに)

あどもひて (まとめ率いて) 漕ぎ行く君は (防人たちは) 波の間を

い行きさぐくみ (押し分け縫って行く)

ま幸くも 早く至りて 大君の 命 (みこと) のまにまに 、

大夫の (ますらをの) 心を持ちて あり廻り (監視を廻り続け)

事し終らば (勤めが終わったら) つつまはず障む (災害にあうことなく)

帰り来ませと一斎瓮 (いはひへ) を (きよめ祓い)

床辺に据ゑて 白袴 (しろたへ) の 袖折り返し

ぬばたまの 黒髪敷きて 長き日を

まちかもこひむ (恋ひ待ちする) 愛しき妻らは (はしきつまらは)

短歌

4 3 3 2

大夫の 鞆取り負ひて 出でて行けば 別れを惜しみ 嘆きけむ妻

“ますらをの ゆきとりおひて いでていけば わかれををしみ なげきけむつま”

(ますらおおのこは靱を背負い出てゆくが妻は別れを惜しんでさぞや嘆いたろう)

4 3 3 3

鶏が鳴く 東壮士の 妻別れ 悲しくありけむ 年の緒長み

“あづまをとこの つまわかれ かなしくありけむ としのをながみ”

(東男の妻との別れは本当はつらく悲しい長い別離の年月になるのだよ)

番歌が続く

4 3 3 4

海原を 遠く渡りて 年経とも 子らが結べる 紐解くなゆめ

“うなはらを とほくわたりて としふとも こらがむすべる ひもとくなゆめ”

(海原をはるかに渡って筑紫の防人に赴きどんなに年月がたとうとも家族がお守りに結んでくれた紐を解くなかれ無事ふるさとへ導いてくれるから)

4 3 3 5

今替る 新防人が 船出する 海原の上に 波なさきそね

“いまかはる にひさきもりが ふなでする うなはらのうへに なみなさきそね”

(今から新しく交替にでかける新防人を海原よ波頭を立てないでやってくれ)

4 3 3 6

防人の 堀江漕ぎ出る 伊豆手船 楫取る間なく 恋は繁けむ

“さきもりの ほりえこぎづる いづてぶね かちとるまなく こひはしげけむ”

(難波の堀江から 防人らが漕ぎ出して行く手船は伊豆造りその櫂を漕ぐ手の休む間がないように防人の妻恋う思いもやむことはないだろう)

家持は、746年に越中国守となり 751年少納言となるまでの5年間を越中の国で過ごした。将来への希望と責任感を持っていたが、同時に悲別への思い、望郷の思いにさいなまれた時期でもあった。この歌には、丈夫意識が強く前面に押し出されているが、一方、家持と防人とはともに大君の命によって地方へ派遣されていくという防人との共通の意識がある。

二首目4398では防人の立場に接近しようとつとめ、防人の感情を強く表現しようとした。歌の調子が、一首目とはかなり異なってきた家持の二面性が表われている。

大君の 命畏み(御言葉を受け賜り) 妻別れ 悲しくはあれど

大夫の 心振り起し 取り装ひ(身なりをとり装い) 門出をすれば

たらちねの 母搔き撫で(母は頭を撫で)

若草の 妻は取り付き たひらけく(どうかご無事で)

われはいははむ(わたしは謹み祈っています) ま幸くて(幸に) 早帰り来と(くお帰りなさいと) 真袖もち(袖をとって) 涙を拭ひ むせひつつ 言問ひすれば

むらとり(群鳥) 出で立ちかてに(出発しきれずに) とどこほり(立ち止まり)

かへり見しつつ(振返りながら) いや遠に(いよいよ遠く)

国を来離れ(故郷を離れ) いや高に(いよいよ高く)

山を越え過ぎ 葦が散る 難波に来居て（難波津に来た）
夕潮に 船を浮かすゑ（舟を浮かべ据え）
朝なぎに 舳向け漕がむと（筑紫に）舳先を向け漕ぎ出そうと
さもらふと（待つ）吾が居る時に 春霞 島廻に立ちて（島の入江にかかり）
鶴が音の（たづがねの）悲しく鳴けば（もの悲しく鳴く）
はろはろに（遠くはるかな）家を思ひ出（吾が家を思い出し）
おひそやの（背負う征矢（そや）が）そよと鳴るまで（音を立てるほど）
嘆きつるかも（もだえ嘆いてしまう）

短歌

4399 海原に 霞たなびき 鶴が音の 悲しき宵は 国辺し思ほゆ
（うなはらに かすみたなびき たづがねの かなしきよひは くになしおもほゆ
（海原に霞がたなびき 鶴の声の哀しい宵は ふるさとの事が思われる）

4400 家思ふと 寐を寝ず居れば 鶴が鳴く 葦辺も見えず 春の霞に
（いへおもふと いをねずをれば たづがなく あしへもみえず はるのかすみに）
（家を思い眠れないでいると 哀しい鶴の声で夜明けをしの 春霞が流れてまだ葦辺は見えない）

これらの歌には防人たちが詠んだ歌と重なる表現が見られる。防人たちの悲別の情に類似して歌うがその抒情においては同じではない。都人の抒情であり家持の粋のなかの抒情であった。

三首目は前の二首と比べて多様な展開をみせている。集められた防人たちの歌を十分に読み取り、幅広く厚みのある防人の悲別の情を歌い込もうとしている。また、山上憶良の影響も強く、農民の貧窮、過酷な境遇での「悲別」を意識的に歌おうとしている。

4408 {防人の悲別の情を陳ぶる歌一首、また短歌}

大君（おほきみ）の 任（ま）けのまにまに 島守（しまもり）に 我が立ち来れば はは
そ葉の 母の命（みこと）は み裳（も）の裾（すそ） 摘み上げ搔（か）き撫（な）で ち
ちの実の 父の命（みこと）は 栲（たく）づのの 白髭（しらひげ）の上ゆ 涙垂り 嘆
きのたばく 鹿子（かこ）じもの ただ独りして 朝戸出（あさとで）の 愛しき我が子 あ
らたまの 年の緒（を）長く 相見ずは 恋しくあるべし 今日だにも 言（こと）問ひせ
むと 惜しみつつ 悲しびませば 若草の 妻も子どもも をちこちに さはに囲み居
春鳥の 声のさまよひ 白栲（しろたへ）の 袖（そで）泣き濡らし たづきはり 別れか
てにと 引き留め 慕ひしものを 大君の 命（みこと）畏（かしこ）み 玉梓（たまほこ）
の 道に出で立ち 岡の崎 い廻（た）むるごとに 万（よろづ）たび かへり見しつつ は
ろはろに 別れし来れば 思ふそら 安くもあらず 恋ふるそら 苦しきものを うつせ
みの 世の人なれば たまきはる 命も知らず 海原（うなはら）の 畏（かしこ）き道を

島伝ひ い漕ぎ渡りて あり廻(めぐ)り 我が来るまでに 平(たひら)けく 親はいま
さね つつみなく 妻は待たせと 住吉(すみのえ)の 我が統め神に 幣(ぬさ)奉り 祈
り申(まを)して 難波津(なにはつ)に 船を浮かす(す) 八十楫(やそか) 貫(ぬ)
き 水手(かこ) ととのへて 朝開き 我は漕ぎ出ぬと 家に告げこそ

(大君(おおきみ)のご任命のままに、俺が防人(さきもり)として家を出発するとき、母さんは、俺の衣(ころも)の裾(すそ)をつかんで引っ張り上げ、頭を撫でて旅の無事を祈ってくれた。父さんは、白くなった髭の上にぼたぼたと涙をこぼし、泣きながらこう言われた。

「鹿の子のように、たった独り、朝早くから旅立っていく愛しい我が子よ。新玉(あらたま)の長い年月を、お互い逢わずにいたら、きっと恋しくなるだろうから、せめて別れの今日の今だけでも語り合おうな。」と、名残を惜しんで悲しまれた。若草のような妻もそれから子供も、ここや向うと方々から俺をとり囲んで坐って、春鳥が鳴くようにうめき悲しんで、白妙の袖を泣き濡らして、手もとに絡みついて、別れることが出来ない、となおも俺を引き留め、いつまでも慕っていたのだった。それでも大君のご命令の畏(おそ)れ多さに、いよいよ旅路についたものの、岡の岬々を曲がるたびごとに、家の方を幾度とも知れぬほど、ふりかえりふりかえりして、だんだんと故郷から遠く別れて来てしまった。父や母のことを思うと心は落ちつかず、妻や子供のことを恋い焦がれると心は苦しく、この世を生きる生身の人間なので、これからどうなるか、みずからの命の程もわからないが、「海原の恐ろしい潮路を島伝いに漕いで渡り、任務を終えて俺が戻って来るまでの間、父さん母さんはどうか達者でいてくれ。変わりなく妻は待っていてくれ。」と、俺の親しみ奉る尊い住吉の大神様にささげものをし、心からお祈りして、難波の船着き場に船を浮かべ、たくさんの楫を取りつけて、船頭どもを号令し動かして、夜明けを待って、俺は漕ぎ出して行ったと、どうか家の者に告げてくれ。)

反歌

家人の斎へにかあらむ平らけく 船出はしぬと親に申(まう)さね(4409)

(家人の身を浄め斎ふので平安な船出だったと父母にお伝えください)

み空行く雲も使と人は言へど家苞(いへづと)遣らむたづき知らずも(4410)

(美しい大空をゆく雲も使いと云うが家に言づてを送る手だてを知らずつらい)

家苞(いえづと)に貝そ拾(ひり)へる浜波はいやしくしくに高く寄すれど(4411)

(家への土産に貝を拾った濱波はいよいよ高く打ち寄せたが)

島陰に我が船泊てて告げやらむ使を無みや恋ひつつ行かむ(4412)

(島陰に船を泊めても今を告げる使はいないただ恋焦れて行くばかりだよ)

長歌は「大君の 任のまにまに」と始まっているが、それには一首目におけるような、天皇への丈夫としての強い忠誠の響きはない。防人たちと同じ次元で使われている。この歌に見える防人の父や母、妻や子に対する気遣いである。「ははそ葉の 母の命は」、「ちちの実

の 父の命は」と繰り返すところに表れている。「若草の 妻も子どもも をちこちに さ
はに囲み居 春鳥の 声のさまよひ 白妙の 袖泣き濡らし」の部分、この歌の最も力強い部分である。家持は、防人たちの歌に、妻子と引き裂かれた男たちの切ない気持を読み込んで感情移入している。これには、山上億良の家族愛の歌が影響している。父旅人は億良と交流があったが、家持とは交流がなかった。しかし家持には億良に通じる人間的な優しさがあり、防人たちの歌とのかかわりを通じてほとぼしり出ている。防人たちに対する同情という次元を超えて、防人たちの魂がのり移ったかの如く、彼自身も防人そのものになって慟哭し、万感の思いをこめて歌い上げている。家持の嗚咽の声が聴こえてくるようである。

更に祈るような気持ちで歌っている歌がある。

「今替(かは)る新防人(にひさきもり)が船出する海原(うなばら)の上に波なさきそね」

(今から交替する新任の防人が船出をいたしますから、海神(わだつみ)よ、どうか海原に波を立てないでやってください。)

大君のために死すべき自己の境遇を受け入れ、その生き方に誉れさえ感じていた家持であったが、防人たちの歌を読むことで、他国の侵攻を防ぐために、盾(たて)となって死ぬべき運命にある彼らの悲痛な叫びに接し、強い衝撃を受けた。大君を守る武人であった家持は、他国の侵攻から御国を守る防人たちの中に自己を見出す。防人たちは、家持の分身でもあった。防人たちの苦しみは、そのまま家持自身の苦しみでもあった。防人たちの悲壮な心持ちが、そのまま自分のことのように感じられた。名もない庶民である防人たちが、自分と同じく死を賭(と)して両親、子供、愛する者たちとの別れをのり越えはるか辺境の守備に赴こうとしている。その事実のもつ重み、防人たちの苦しい境遇に共感しながらも、彼らを励まそうという思いが見える。時が経つにつれて、彼らの背負ってきた大きな悲しみを、両親や妻子と引き裂かれた男たちと一心同体となって嘆き悲しむ。生来の鋭敏な感受性によって愛する人との幾多の別れに対する情け深さ、人間的やさしさが、慟哭と共にほとぼしっている。

第3章 大伴家持の人生と和歌

1. 家持の生涯

万葉集を編纂したといわれる大伴家持の生涯と歌を重ね合わせてみる。大伴家持(718~789)は桓武天皇の皇子早良親王の春宮大夫であった。大伴氏は、天皇を守護する近衛兵としての役割を担う武人の役割を担っていた。大伴旅人の長男で、母は旅人の正妻ではなかったが、大伴氏の家督を継ぐべき人物に育てるため、幼時より旅人の正妻・大伴郎女のもとで育てられた。しかし郎女とは11歳の時に、また父の旅人とは14歳の時に死別している。天平10年(738)に、内舎人として朝廷に出仕しその後、従五位下に叙せられ、29歳の年に宮内少輔(律令制の省の次官)となった。同年6月には、越中守に任じられ、8月に着任してから、天平勝宝3年(751)7月に少納言となって帰京するまでの5年間、越中国に在任した。家持の越中国赴任には、当時の最高権力者である橘諸兄が新興貴族の藤原氏を抑える布石として要地に派遣した栄転であるとする説と、左遷であるとする説があるが

ともかく、後世の不遇をみると越中国（現在の高岡市）の時代が家持のもっとも充実した時代だった。

1) 越中に国守として赴任

越中で詠んだ歌 3 首がある。

「春の園紅にはふ桃の花下照る道に出で立つ娘子（おとめ）」

（春の園に紅に美しく映えている桃の花、その木の下を照らしている道に出で立っている少女よ）

北国の遅い春がやっと訪れ、人々は憧れをもって迎える。越中のなかですばらしく美しいじきである。庭中の桃と李が時をおなじくして咲き誇ってまことにあでやかな美しさがある。

「もののふの八十娘子（やそおとめ）らが汲みまがふ寺井の上の堅香子（かたかご）の花」
（大勢の少女たちが入り乱れて水を汲んでいる。寺井のほとりに咲くかたかごの花よ）

家持は越中に来ていろいろ珍しい事物（葦付、つまま、厚朴、つなし、鶺鴒川、あゆの風）に興味を示し歌に詠みこんでいる。かたかご（かたくり）の花もその一つで寺井のあたりに自生していたようだ。寺井に集う少女たちはこの地における雅な女性達であろう。遠く離れた都の官女たちを想っていた。

「朝床に聞けば遙けし射水（いみづ）川朝漕ぎしつつ唱（うた）舟人」

（朝の寝床で聞いていると、舟歌のはるかなことよ。射水川を朝早く漕ぎながら歌う舟人の声は）

3 月 3 日の朝、家持はまだ寝床で静かにじっと耳をすまして舟人の歌を聞いている。さっぱりとしたまだ寝床から離れられないもどかしさを感じる。国守の居館は二上山を背にし、射水川（いみづがわ）に臨む高台にあり、立山連峰を望むことができる地にあった。

越中守在任中の家持は、都から離れて住む寂しさはあったが、官人として、また歌人としては、生涯で最も意欲的かつ充実した期間だったと考えられ越中の 5 年間は政治的緊張関係からも離れていたためか、歌人としての家持の表現力が大きく飛躍した上に、歌風にも著しい変化が生まれ、歌人として新しい境地を開いている。

2) 帰京後、政権の嵐の中で

家持は越中守在任中に従五位に昇進する。しかし帰京後の昇進はきわめて遅れ、正五位下に進むまで 21 年もかかっている。しかもその官職は都と地方との間をめまぐるしく往来し大伴氏の氏上としては恵まれていなかった。橘氏と藤原氏との抗争に巻き込まれ、さらに藤原氏の大伴氏に対する圧迫を受け続けていた。家持は一族を存続するため、ひたすら抗争の圏外に身を置こうとするが、そのため同族の信を失うこともあった。一族の長として奮起しなくてはならぬという責務と、あきらめとの間を迷い続けていた。

「現身（うつせみ）は数かぎりなき身なり山河の清けき見つつ道を尋ねな」（4468）

「病に臥して無常を悲しみ修道を欲して作れる歌」である。病にあって前途の安心を望むが実は悲哀の心が深く浸み込んでいる。

「春の野に霞たなびきうら悲しこの夕影にうくひす鳴くも」（4290）

（春の野に霞がたなびいてなんとなくもの悲しい。この夕方の光の中にうぐいすがしきりに鳴くことよ）

少納言に任じられ越中から帰京するが都は家持をこころよく迎えてくれず藤原氏が専横を極めて大伴氏も衰退の傾向にある。憂愁の思いに閉ざされる家持はやるせない。家持の心境は孤独であり、なんとも言えない哀愁を感じる。

3）因幡国守、そして多賀城へ因幡国庁址

「新しき年の初めの初春の今日降る雪のいけしけ吉事（よごと）」（4516）

（あたらしい年の始めである初春の今日降り積もる雪のように、いよいよ重なれ、良いことが）

759 年因幡の国庁における新年の宴の歌を最後に「万葉集」は閉じられる。この歌のあと家持の歌は残されていない。家持がこの後、歌を詠まなかったのかどうか不詳である。。家持は晩年の 781 によりやく従三位の位につく。中納言・春宮大夫などの重要な役職につき、さらに陸奥按察使・持節征東将軍、鎮守府将軍を兼ねる。家持がこの任のために多賀城に赴任したか、遙任の官として在京していたかについては両説がある。死没地にも平城京説と多賀城説がある。

4）家持の没後

785 年 68 歳で没す。埋葬も済んでいない死後 20 日余り後、藤原種継暗殺事件に首謀者として関与していたことが発覚し、除名される。領地没収のうえ、実子の永主は隠岐に流される。家持が無罪として旧の官位に復されたのは死後の 806 年であった。

第 4 章 歌の呪力

1. 言霊

「言霊」とは上代の人々が信仰した言葉の持つ神秘的な霊力であり良い言葉は幸いを招き呪いの言葉は悪霊を生じさせて、人事や社会に影響を及ぼすと信じられた。

「古代では万葉集に「言霊の幸ふ国」とか「日本国は言霊の祐くる国」とあるように、言葉には霊力があって一種霊妙な動きをなすものとされていた。これがいわゆる言霊の信仰で、それは、祝福の言葉をのべれば幸福が招来され呪詛の言葉を述べれば不幸にいたるという信仰である。祝詞はこの言霊信仰の上に成立したもので盛んにほめたたえる言葉を使い

悪いことばは使わなくなり、善言美辞を尽くした形となった。」(「祝詞入門」小野迪夫)

渡来人と言われる山上憶良は倭国を「皇神の厳しき国、言霊の幸わう国」とした。柿本人麻呂も詠んでいる。

“しきしまの大和の国は、言霊の助る国ぞ 真幸くありこそ”(3254 柿本人麻呂)

(わが日本の国はコトアゲ(言挙げ)は、しない国だが、あなたのために敢えてコトアゲしてご無事を祈る)

更に言霊の歌もある。

“言霊の 八十の街に 夕占問ふ 占まさに告る 妹は相寄らむ”(2506)

(夕占の辻占いで問うと占いは本当に云った貴女も同じように思いあなたに寄り添うと)

辻占いで、好きな人が靡いてくると言われて、その通りになる。事代主は言代主ともされていることでわかるように、「コトシロ」とは言柄を知るの意味だが、神の言葉を伝えることと同義でもある。「言挙げ」とは自分の思うことを言葉に出してはっきり言うことである。上代においては、「ことあげ」はタブーとされ、あえてそれを犯すのは、重大な時に限られた。

“葦原の 瑞穂の国は神ながら言挙げせぬ国 しかれども 言挙げぞ吾がする 言幸くま幸くませとつつみなく 幸くいまさばありそなみ ありても見むと この荒磯に見る

“ももへなみ千重波しきに 言挙げす吾れは言挙げす我れは “ (3253 柿本人麻呂)

(穀物がいつも豊高にみのる国は あまつ神の御心のままにする国 人はことごとに言葉に出さずとも 吾は敢えて言葉に出そう 幸言葉のようにご無事で 千回も繰り返してに寄せる波のように 幸せであれと つつがなく 幸せであられるならば 百回も 寄せる波のように わたしは言挙げします 幸多かれとわたしは言挙げしますとも)

「言挙」のように「言」の語字が使われている場合、神との約束や重大な決意を示し、「言挙」や「言霊」の言葉は神との交接に関わる行為を表す言葉として、人が「言挙」をたやすく行うことは神を弄ぶこととなり、それはタブーであった。

言霊を信じているのにどうして「言挙げせぬ国」か。言霊の世界では「言えば実現する」からうっかりしたことは言えない。言霊を信じるからこそ滅多にコトアゲをしてはならない。“コトダマを信じる”とは言ったこと(意見)と起きたこと(現実)に因果関係を認めることである。口にすることで現実が左右されるということである。不幸を招くような発言をする(コトアゲする)と非難されることは、現在も日本人の心に残っているようである。

「不吉なことを言うと禍を招く」のである。コトダマ世界では、霊力の差はあるもコトアゲ(言挙げ)すること自体、現実がその方向へ動くことを念じている(望んでいる)のである。言霊は、陰陽道などの呪術につらなるものであり言霊の世界では言葉と現実が表裏一体のものであった。

「呪」という言葉には3つの使い方があった。

- 1)「呪(のろ)う」:相手に災いがあるように祈る。「人を呪わば穴二つ」などのろうこと。
- 2)「呪(まじ)う」:災いをのがれるように、また、他人に災いをくださうように神仏などに

祈ること。まじない。

3)「呪(じゅ)」:もと、仏教語の陀羅尼(ダラニ)。悪事を払い、病気を治すために、口で唱える秘密の文句。仏教では、不思議な力をもつ秘密のことば。真言。神呪。呪文・呪術。

家持の防人への歌 4335(前出)は“呪(まじう)”であった。

“今替る 新防人が 船出する 海原の上に 波なさきそね ”

(今から新しく交替にでかける新防人を海原よ波頭を立てないでやってくれ)

防人たちの災いを除くことを祈願した歌である。

2. 鎮魂の呪力

万葉集には、長屋王、大津皇子、有間皇子ら悲運の最期を遂げた人々の歌が収められている。無実の罪を着せられ詩に迫いやられ憤死した人びとの歌が収められている。無実とはいえ「犯罪者」であり反政府者である。人々に語り継がれると同時に次の世代へと天皇の命令で古今集に勅撰されている。古代日本人は、政争にやぶれた者、国家に対して不満を抱いて死んでいった人たちの和歌を「言霊」として語り続けることで、「鎮魂」になると考えた。

有間皇子の歌がある。

岩代の 浜松が枝を 引き結び ま幸くあらば またかえ見む (141)

家にあれば 筍に盛る飯を 草枕 旅ににしあれば 椎の葉に盛る (142)

中大兄皇子に無実の罪を着せられ取り調べのため連行された歌である。再び無事で帰れたらこの松枝の結び目をみることができだろう(ぜひそうしたいものだ)と詠ったが再びこの結び目を見ることはなかった。

その後に長忌寸奥麻呂の歌が続く。

岩代の 崖の松が枝 結びけむ 人はかえりて また見けむかも (143)

有間皇子は二度と松枝を結ぶことはなかったと哀切する。大津皇子にも同様の歌がある。辞世の歌である。

ももづたふ磐余(いわれ)の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ

処刑後、大来皇女が退下・帰京途上で作った歌が続く。

神風の伊勢の国にもあらましを なにしか来けむ君もあらなくに (163)

見まく欲(ほ)りわがする君もあらなくに なにしか来けむ馬疲るに (164)

桓武天皇は大伴家持らの罪を許しなぜこれらの歌をのせまた大伴家持らの罪を許したのか。それは怨霊を畏れてである。鎮魂のためである。言霊の世界では「言葉」は単なる記号ではなく、その言葉を発した人間の分身である。無実の罪で死んだ人たちの歌を語り伝える

ことは反逆ではなく鎮魂になる。やすらかに眠ってください。永遠に生きてください。という鎮魂である。上代は、和歌を通して君も臣下も一体となっていたところがある。大伴家持の大君に向かう歌や防人への悲別の歌を詠むときにも一体となって鎮魂したのである。

上代の人々は人の死を「魂」が「肉体」から遊離するものと考えていた。死者の再生を願うためには、まだ埋葬されていない状態において魂が戻ってくるようにと、呼びかけを行った。「葬歌」の始まりである。その後、死者に靈魂を呼び戻すという神招ぎの思想は次第に薄らぎ葬歌は天皇家の葬儀の場合にのみ形式的に残された。一方、死者を呼び戻すのではなく、死者の魂を鎮め、あの世へ送り出すというレクイエムの挽歌が葬歌から発生した。挽歌はモガリの屍の前で行われた哀悼の歌であったが、文学的な意味合いを含み万葉集には挽歌が集められ悲しみの表現とともに鎮魂の歌が集められている。

。

また、鎮魂は古代では長寿を祈る呪術でもあった。鎮魂歌は外から強力な魂をふり憑け遊離する魂を鎮めることによって、長寿を祈る呪歌であった。桓武天皇が家持の罪を許したのは無実の罪であることを知っていたためである。鎮魂することによって“たたり”を封じようとしたからである。万葉集は言霊や怨霊信仰から作られた歌集なのである。

3. 歌は打つ

歌は「打つ」という意味とも関係し、言葉の力（言霊）によって相手の感情を揺さぶるものであるといわれている。古代において言葉は単なる名称でも道具でもない、実体そのものであった。歌の音数率や枕詞は、歌を日常の言葉から区別する特別なしるしであった。序詞や、称辞、長歌の繰り返し表現を具えることによって和歌には不思議な力が宿るとされた。言霊のはたらきである。その不思議な力は、歌の向かう対象に作用を及ぼしあい対象への讚美や鎮魂という働きをした。

歌の語源説に折口信夫の「訴え」説がある。対象に訴えるから歌だという。歌の力は、歌いかけられた側にとって、危険と隣り合わせることにもなった。歌いかけられた側はその力をまともに引き受けることになるからである。歌には呪力があることから、歌を詠みかけられたらその力を和らげる反歌があった。

雄略天皇の有名な歌がある。

籠（こ）もよ み籠（こ）持ち 掘串（ふくし）もよ み掘串（ぶくし）持ち この丘に
菜摘（なつ）ます児（こ） 家聞かな 名告（なの）らさね そらみつ 大和（やまと）の
国は おしなべて われこそ居（お）れ しきなべて われこそ座（ま）せ われこそは 告
（の）らめ 家をも名をも

（籠（かご）よ 美しい籠を持ち 籠（へう）よ 美しい籠を手を持ち この丘で菜を摘む乙女よ きみはどこの家の娘なの？ 名はなんと言うの？ この、そらみつ大和の国は、すべて僕が治めているんだよ 僕こそ名乗ろう 家柄も名も）

なぜ天皇は乙女の名を尋ねるのか。万葉集では、人の名前を呼んではいけない、知らせてはならないという禁忌（タブー）がある。古代の人々は名を呼ぶこともタブーとして恐れていた。名前は人格そのものであった。その人の名前を知れば、その人を呪術的に支配することができた。精霊が発動するのである。コトダマの世界では言葉の一つ一つが単なる記号でも道具でもなく場合によっては「凶器」にすらなり得た。また虚構を組み立てるための道具でもない。歌は本人の「霊」そのものであり、虚構ではなかったのである。

4. 贈答歌

男女の贈答歌は、歌垣の歌に起源をもつとされる。歌垣とは、“上代男女が山や市などに集まって互いに歌を詠み交わし舞踏して遊んだ行事である。一種の求婚方式で性的解放が行われた。贈答歌は、歌による男女の挑みあいであり、歌による闘いがある。男の詠みかけた歌に、女は反発・揶揄の姿勢を示すことで、巧みにそれを切り返す。男女の決定的な対立を生み出すのではなく、むしろ両者の調和を生み出そうとするところがある。また、身体的欠陥をあげつらう歌のやりとりも同様で一方的な悪口は、相手に向けた呪力の力でもあるから、言い返すことでそれを和らげたり、やりとりを通じて互いの調和が導き出される。悪口の言い合いであるがそこに社交の具としての機能が果たされている。

歌い手に依り憑く歌の呪力とはどのようなものであろうか。心とは最初から自明なものではなく、一人一人の体に内在するが、実態としては、把握しえない何ものかとしてあったらしい。内部にわだかまる闇のようなものであり、さらに「言えば外界との関係においてはじめて意識されるようなものが心であった。」心のはたらきは外界の刺激によってはじめて意識されるようになる。歌における心のありかたは、和歌の表現構造の基本ともいえるべき寄物沈陳思歌（物に託して表現する歌）の“景プラス心”の構造になかに明瞭にみられる。

君が着る三笠の山に居る雲の立てば継がる恋もするかも

（あなたが着ける御笠、その三笠の山にかかる雲のように、湧き立ってはまた次々と続く恋をすることであるよ。）

「雲の」までが序詞＝景になる。三笠の山に次から次へと湧き立つ雲を絶えず生じてくる恋情に重ねて表現している。序詞の景は下句の心（恋情）を引き出している。外界が心の形を浮かび上がらせている。心とは外界からの刺激によって初めて気づかされる。歌は外界の景が歌い手に依り憑くことで自ずと歌わされるものであった。元来、何かが依り憑いて歌が口をついて出たものであった。次第に歌い手の主体的な意識が強められ意志作用（自己表現・自己表出）するようになった。

5. 神話について

「はじめに言葉ありき。言葉は神と共にあり、言葉は神であった。言葉は神と共にあった。

万物は言葉によって成り、言葉によらず成ったものはひとつもなかった。言葉の内に命があり、命は人を照らす光であった。その光は闇の中で輝き、闇が光に打ち勝つことはなかった」（「ヨハネの福音書」より）とあるように世界の神話においては、言葉の霊力によって天地が創造されるという開闢神話が数多くある。

人類は文明に達する前には、何か漠然とした物理的な力、あるいは自然力に対しては、畏怖の感情を抱いていた。西欧の人類学者の神話研究では、自然力への信仰と働きかけの呪術だけから成る文明を人類の宗教の原初的な形態として「前アニミズム」と呼んだ。そこから文化や知能が発達して靈魂や精霊に対する信仰すなわちアニミズムの段階とした。靈魂や精霊が擬人化されて多神教の神々が発生したと考えた。進歩史観では神話は多神教に宗教が発達して創り出されたものとした。しかし神話は優れた歴史叙述でもある。神話の内容が示す一見荒唐無稽な非合理的にみえる形象や物語は、記述した人々にとって自分の生きている世界から遠く、分からない異世界の、過去にあった伝承を文書化した歴史記述である。神話には、古代のひとの心や情が内蔵されており、現実の生活ととりまく世界の事物の起源や存在論的な意味が象徴的に説かれている。神をはじめとする超自然的存在や文化英雄による原初の創造的な出来事・行為が展開され、社会の価値・規範とあるいは葛藤を主題とされている。神話によって論理の言葉では到達できない真実を垣間見ることができる。

わが国には古事記というドラマティックで面白い物語がある。空の一番高いところに神々があらわれ、続いて夫婦の神が島々を生み・・・と物事の起源が語られる。そして天皇家と大和朝廷の始まりが描かれている。イザナギの黄泉行き、暴れん坊スサノオの活躍、海幸彦と山幸彦、神武天皇の東征、英雄ヤマトタケルの活躍と死が語られる。古事記においての神話は神語（かみがたり）という。この神語のなかで歌による言霊の交換がある。男女の恋愛の歌も多い。最初の恋愛歌といわれる大国主が高志（コシ）の国で出会った沼河比売が八千矛神（大国主）に対して詠んだ歌二首を紹介する。

ここにその沼河日売、いまだ戸を開かず内より歌よみしたまひしく

八千矛やちほこの 神の命みこと 萎ぬえ草の 女めにしあれば 我わが心 浦渚うらすの鳥ぞ 今こそは 我鳥わどりにあらめ のちは 汝鳥などりにあらむを 命は 死なせたまひそ いしたふや 天馳使あまはせづかひ 事の 語りごとも こをば

（八千矛の神さま、なよやかな草のような女ですから、私の心を譬えるなら、入江の渚に餌をあさる鳥、あちこちふらふらとさ迷っているのです。今は我が家の鳥ですが、あとで貴男の鳥になりますものを。ですからこの命は死なせないで下さいませ。走り使いの者が伝え聞く、事の語り伝えは、かようでございます。）

青山に 日が隠らば ぬばたまの 夜よは出でなむ 朝日の 咲えみ栄え来て 栲綱たくづのの 白き腕ただむき 沫雪の わかやる胸を そ手抱だたき 手抱ただきまながり 真玉手またまで 玉手さし纏まき 股長ももながに 寝いは寝なさむを あやに な恋ひきこし 八千矛やちほこの 神の命みこと 事の 語りごとも こをば

（青山に太陽が隠れたら、真っ暗な夜がやって来るでしょう。貴男は朝日のように晴れやか

に微笑んで来られて、私の真っ白な腕、沫雪のようにやわらかい胸を、その手で愛撫し、抱いていとおしみ、美しい手をさしかわし、足をゆったりと伸ばして、寝ましょうものを。ですから、ひどく恋しがらないで下さいな、八千矛の神さま。事の語り伝えは、かようでございます。)

6. 言霊のトランス

人類社会における多くの祝祭儀式の極致では、トランス(意識変容)現象がみられ憑依(他の生きものや精霊がのりうつった状態、ものつき)がしばしばみられる。トランスが人類の遺伝子に普遍的にプログラムされた社会行動の一つといわれる。健全な人間を非日常的な意識状態、陶酔・興奮・過覚醒状態、催眠状態に誘導してトランス状態に入ったひとは、多くの場合、当該する儀礼を成就させる重要な役割を果たす。トランスの発現は、共同体の構成員にとって、神々との交信の成立を意味し、人知を超えた災厄を祓うための儀礼や豊作豊漁を神々に感謝する儀礼のもっとも重要な場面を構成している。

わが国では古代より、巫女に神が乗りうつって神のお告げをきくシャーマニズム信仰があった。卑弥呼は、鬼道(きどう)と呼ばれるまじないで、天災や戦争を占いながら霊意による祭政一致を行ったといわれる。琉球におけるノロとよばれる神女、東北のイタコという巫女による巫術・巫俗などは、現在も残っている。日本におけるシャーマニズムは神道と共に古来からの世界観・超自然感の民俗の一部となっていた。

和歌が現れる以前の上代歌謡では、感情の高まりから発せられた叫び・掛け声が次第に成長して、祭や労働の際に集団で歌われるようになった歌謡があったといわれる。多くは文字に記されることなく失われてしまった。古事記や日本書紀に採られた上代歌謡を、特に記紀歌謡という。独立した歌謡ではなく、物語の効果を高めるために用いられていることが多いが、宮廷人が歌った儀式的歌謡や、創作もある。片歌・旋頭歌・短歌・長歌などの五音と七音を標準とする歌体に、対句・くりかえし・枕詞・序詞などの技法が用いられている。上代歌謡の多くは神楽歌や催馬楽などの楽器を伴う儀式歌となったが、その歌体・技巧は後の和歌の母胎ともなっている。統一国家が確立してゆく中で、大陸から漢詩が入ってきて個人の気持ちを個々に表現する歌が盛んに作られるようになった。これらの言霊の歌を大成して万葉集がつくられた。

7. 怨霊の時代

大伴氏の「言立て(家訓)」を、詔勅に取り入れた際に、語句を改変したといわれる。万葉学者の中西進は、大伴氏が伝えた言挙げの歌詞の終句に「かへりみはせじ」「長閑には死なじ」の二つがありかけあって唱えたものといわれている。

家持は、桓武天皇の皇子早良親王の春宮大夫であった。早良親王は桓武天皇によって「無実の罪」で死に追いやられた。家持は「早良皇太子反逆事件」の首謀者の一人として桓武天皇によって早良親王と共に極刑に処せられている。

平城京から平安京へ遷都する間に長岡京への遷都があった。新都の造営のために桓武天皇から抜擢された藤原種継がいた。この種継は桓武を天皇にするのに大功のあった藤原百川の甥であったが、何者かに暗殺された。犯人として大伴継人、真麻呂ら大伴一族の人々が逮捕され極刑に処せられた。桓武の皇太子だった早良親王も連座され流罪の判決をうけた。早良親王は自分は無罪だと主張して抗議したが認められず憤死した。(実際無罪だった。) 桓武は実子の安殿親王(のちの平城天皇)がおり、天皇にしたいため早良親王の存在が邪魔だった。後にこの安殿親王が病気になる陰陽師に占ってもらうと「早良親王のタタリ」と出た。桓武は驚き畏れ罪を取り消し早良親王に「崇道天皇」の称号をおくった。側近である大伴家持も極刑の宣告をうけたが、家持は、陸奥按察使の任で東北の地に住んでいた。種継暗殺の一か月前にすでに任地で病死していた。死刑には処せられなかったが官位はすべて剥奪され庶人の位に落とされた。官位が従三位中納言から無位無官にされ大伴一族全体にとって大打撃であった。「犯罪者」となった。家持の名誉が回復されたのは21年後の806年であった。この年桓武は70歳で崩御したが、その死にあたって種継暗殺に連座した人々の官位を回復し流罪者を放免した。家持も「犯罪者」の汚名を漱がれることとなった。

祟りは祟れる側にやましい心があるからこそ成立する。万葉集は藤原氏を糾弾するために編まれた歌集であるともいわれる。大伴家持が編纂に係わったが大伴氏は父の旅人から藤原氏を恨んでいた。藤原氏は、藤原不比等の子藤原四兄弟(武智麻呂、房前、宇合、麻呂)たちが聖武天皇の信任をえて藤原の世を築上げた。ライバルの長屋王を支持する大伴旅人を太宰府にとばし長屋王を孤立させた。万葉集は、藤原氏の手で闇に葬られた真実の歴史を、歌を利用して後世に残そうとする試みである。無実の罪で藤原氏に殺され追い詰められていった者たちの魂の叫びを数多くもとりあげている。

藤原氏は古代豪族の蘇我氏、物部氏、大伴氏、阿部氏、橘氏、などを次々と滅ぼし、朝廷を独占し邪魔ものを排斥した。藤原氏は権謀術策・陰謀で千年の権力の基礎を築いた弱肉強食の氏族であった。権力闘争の犠牲者は多い。安曇親王、橘奈良麻呂、大津皇子、蘇我入鹿、蘇我倉山田石川麻呂、古人大兄皇子、有馬皇子、軽皇子、長屋王など数知れない。

平安律令国家以降貴族たちは軍事権を放棄し武士の手に渡し鎌倉幕府の成立へと至る。貴族たちは武力を放棄してしまったが武人には殺されなかった。なぜ放棄したか。仏教の末法思想の流行もあるが日本人の中に「軍隊、兵士・武装」を忌み嫌う「宗教的信念」として「穢れ」の思想があるからである。さらに言霊があり怨霊信仰があるためであった。「罪も禍も過ちも皆同じく穢れで悪霊の仕業」と考えたのである。

第5章 万葉集の精神―滅びの精神

1. 軍歌か鎮魂歌か

家持の有名な歌「海行かば 水漬く屍・・・・」(前出)は戦前、国民精神総動員強調週間を制定した際のテーマ曲であった。大本営発表や出征兵士を送る際に使われた一方で、戦没者の遺骨を迎える際にも使われ「戦闘歌謡」でありかつ「鎮魂歌」であった。

（海を行けば、水に漬かった屍となり、山を行けば、草の生す屍となって、大君のお足元にこそ死のう。後ろを振り返ることはしない）

この歌は、朝廷の“内の兵”であった大伴氏や佐伯氏の間に伝わっていた戦闘歌謡であった。大伴氏は物部氏が司った「国軍」とは異なった近衛兵であった。戦後は、「この歌は、戦争賛美、戦死賛美を助長しかねない」と批判された。本居宣長の和歌や楠木正成の話などと共に伝統的な文芸が戦意高揚に使われたことから、戦後の教育界では、本来は軍国主義と無関係なものまで“戦争を賛美する”と非難の対象された。特に太平洋戦争中に玉砕を報せる大本営発表の前奏曲として流れた「海ゆかば」（作曲：信時潔）は、家持の「賀陸奥国出金詔書歌」（「万葉集」巻十八）に拠る防人への歌であったが評判が悪い。しかし、特攻隊の兵士たちは、これらの万葉集の歌をこころの糧として片手に先陣に出立したといわれる。

「萬葉集の精神—その成立と家持」を片手に散っていった神風特攻隊員も多かった。彼らに残されたのは滅びの精神で死ぬことであった。万葉集は心の不安を鎮める歌でもあった。人類に戦いがなくなれないかぎりどこの国でも軍歌があり鎮魂歌がある。戦いによる無念の死者に対する直情的な哀悼の歌は、政治や思想を越えて胸を打つ。

2. 大伴家持の覚悟と安田與重郎の滅びの精神

民族主義と反近代主義に立った日本浪漫派の文芸評論家安田與重郎は、太平洋戦争下の青年層に大きな影響をあたえた。日本浪漫派とは 1930 年代後半に、保田與重郎らを中心とする思想家、評論家たちが近代批判と古代賛歌を支柱として「日本の伝統への回帰」を提唱した文学思想の集まりであった。亀井勝一郎も創刊メンバーであり伊東静雄、太宰治、檀一雄、駒田信二らも同人として加わっていた。周辺人脈には、蓮田善明、中原中也、三島由紀夫がいる。同人たちは必ずしも意見や態度が一致していたわけではない。戦後反動的に流行したプロレタリア文学運動があつた。しかしコミンテルン主導のプロパガンダ文学運動であった。幻滅した文学者たちは壊滅して文学界は混迷した。「日本古典に帰る」日本浪漫派の作品は、暗い空気を一掃し青年たちの代替思潮となり戦後文学を風靡した。

安田は大和桜井に生れ幼少時から日本の故郷に親しんでいた。日本古典の教養に、ドイツ・ロマン派から学んだ〈イロニー〉の方法を接着させ、独自の晦渋（かいじゆう）な文体で〈敗北の美学〉を謳（うた）いあげ、プロレタリア文学運動壊滅後の虚無的な時代を生きる青年層を魅了した。“ロマン的イロニー”とは、“一方で対象に没頭しつつ、他方でそれに距離をとって皮肉に見ることにより、自我をあらゆる制約から解放する態度”である。著書には「近代の終焉」「絶対平和論」「後鳥羽院」「日本の橋」「日本に祈る」「戴冠詩人の御一人者」「エルニーニョ現象エルテルはなぜ死んだか」などがある。

3. 安田のイロニー

「萬葉集の精神」は昭和 15 年秋、皇紀 2600 年を祝って脱稿された。天平文化を仏教文化と見倣す一般の風潮を排し、万葉集の成立事情からその文化を見直すべきだとする天平文化論の性格の作品である。安田は、万葉集の成立に果した大伴家持の役割は、国史の信実を再構築する営みにほかならないという。戦中、古典がもて囃され、国粋が幅を利かす時局

とは離れて「今日に於て万葉集の最後の読者であるかもしれない」と誌した保田は、自らを家持の孤影に重ねていた。

大伴氏は、古くから朝廷の「内の兵」―親衛隊として、特別な家柄であった。大伴氏の伝統を背負った家持は、天皇を敬愛し、天皇のために働き、天皇のために死んでいくことも厭わない、極めて純粋な精神の持ち主であった。保田はそこにこそ、日本人の最も美しい精神が表れているという。日本人の美しい精神は、陰謀や権力や様々な政治的駆け引きによって汚されて滅んでいく。滅んで行くが、日本人はそれに対して、深い愛着や美学を感じ、何とも言いようのない共感を覚える。それもまた日本人の美しい精神でありその日本の精神を最もよく表現しているのが万葉集であるという。「萬葉集の精神」で保田與重郎は万葉集の歌から肉体は滅べども不屈の精神は永遠に残るイメージを紡ぎ出した。太古の昔から日本人が共有してきたワビ、サビ、滅び行く者への愛惜、無常、ものの哀れ、儚さなどに昔の日本人は「美」を感じてきた。「生への固執」から来る、西欧近代の「力と謀略」からなる文明のナショナリズムとは異なるものである。「道義」という日本の精神は、西欧的な「私利私欲」や「力」の前に敗北する。金のために雇われた外人部隊や傭兵でもない。日本の精神では滅びの覚悟なくして戦争はできないと考える。しかし、“敗北との引き換えによって日本の精神は護られる”というパラドキシカルな思想が保田の思想である。どうせ敗北するなら日本の精神で死んでやろう、散るならパッと散ってやろう、下等な相手にやられるくらいならこっちから死んでやろう・・・こうした日本的な精神は欧米人には理解不能な考え方である。勝てば良い、結果さえよければよいという考え方とは異なる。

「萬葉集の精神」では、大伴家持を筆頭とする大伴一族が藤原氏の陰謀によって没落し、滅びていく様子が描かれている。保田は万葉集をそのような滅びの美学として読もうと言う。特に、防人歌には大伴家持の覚悟があらわされている。壬申の乱後約八十年が経つた後の、防人をはじめとする草莽の民たちによつて大君への純粋な念ひが詠はれている。しかし、その純粋を裏切るやうな藤原氏の陰謀の政治が背景にあった。その間に立つて、大いなる責任を感じた大伴家持は歌をもつて「國の柱となり神と民との中間の柱になるものは自分以外にない」といふ自覚に達した。昭和十年代に於いて保田與重郎は、この家持の自覚・覚悟を引き継ぎ、大東亜戦争に面して、自らからも文人として、この神と民との間に立つ柱となる自覚を覚えたのであった。

文芸評論家の小川榮太郎氏の論を引用する。

“保田は萬葉集を解いたのではなく、自らの言葉で同じ道を踏まうとした。保田自身が現に経験してゐた、日本の更に巨きな亡びの自覚が、それを彼に強ひたからだ、と。文學者とは、ともすれば離叛していかうとする精神と物質を仲介する橋にならふとする人である。ことばをもつて、神と民との中間の柱になることを念じ、悲願し、志す人である。さういふころざしを持つ人の系譜が、柿本人麻呂から大伴家持へ、そして幕末の國學者たち、維新の志士たちへ、更に保田與重郎へと引き継がれていることが、この書を読んで改めて強く感じることである。現實の世の混亂・危機から、人のところを救ふのは、まづもつて、ことばであ

る。人のこころを覺醒させ、非本質的なところから本質的なところに立ち返らせる、そんなことばなのである。”

安田の文章は、難解で抄訳が難しいが、「萬葉集の精神」から抜粋する。

「思想を“ことあげせぬ”という意識において古代人は国の精神を“言霊の風雅”に表現したのである。・・・古典人の思想では、皇神の道義をいうことが、すなわち言霊の風雅をたてることであった。詩と思想のこの深遠な一致が、わが精神の文化の大本にあった。ここに於いて萬葉集が草莽の歌として表現したところの、“ことあげせぬ”といわれる論理が、どのような表現をとるか明らかである。・・・歌によって大君と臣との結ばれを示す萬葉集の思想は深い。歌は我が国の歴史では、神詠に始まり、現実の歌は創造として神の直接の生産（むすび）になるものである。すなわち君と臣の情を通ずる唯一の道と考えられた。」

安田は、萬葉集に現れている古典の精神を、現在の文芸の創造という立場から論ずるために、萬葉集の成立を、その詩歌創造の契機から鮮明にしようとした。萬葉集に現れた歴史の精神を、上代日本人の最高の意識を通じて見るために、大伴氏の異立（ことだて）の歴史と精神に沿いながら、家持の自覚と回想を主題とした。防人の歌の指導者としての家持は、最も重大な文学者としての責任を自覚した。偉大な沈痛なことを自覚した文学思想家である。永遠な人倫の根底となる神意の保持を素朴に維持し国の精神を誤らないように大本の思想の確立を考えた。家持の歌は非常な孤独を思わせる歌である。彼は時代の先端に身を置きつつ、心の奥で密かに古い歌の姿への情熱に燃えていた。

第6章 終わりに

萬葉集は、古代人の心の叫びを歌にしている。筆者が初めて接したのは高校の国語の授業であった。60 年安保世代の国語教師による授業であった。日頃唯物史観論を生徒に説く教師であったが、萬葉集が愛読書であったらしく一句ずつ熱く語った。萬葉集の時間だけは唯心論的講義であったことを印象深く覚えている。彼は当時流行したプロレタリア文学に幻滅を感じていて萬葉集を愛読したようであった。萬葉集の直情的な心の叫びに共感していたのだらうと思う。

萬葉集には長歌・短歌・旋頭歌・仏足石歌など 4500 首余りが収録されている。天皇、皇族、貴族、大官人から一般民衆までの歌を集めた詞華集である。古代の人々の持っていた勃興的で意欲的なエネルギーにふれることができる。古代日本人は、政争に敗れた者、国家に対して不満を抱いて死んでいった人たちの和歌を言霊として語り続けることで鎮魂になると考えた。家持の防人歌の選歌は、プロパガンダではない。戦中“里心がつく”と召集兵たちの家族との交信を検閲・捨象した軍部とは異なる。防人歌の内容で大半は“妻・恋人を思う”“母を思う”父を思う”であった。数は少ないが“望郷”“悲哀、”忠君“”体制批判“子进行”歌も選ばれている。

本稿の防人歌を調べるきっかけは、武道稽古の影響が大きい。筆者は都内の某武道場に通い合気道の稽古を 20 年以上続けている。稽古仲間は学生を含む老若男女様々な職業の社会

人と出会うが、自衛官や警察官 OB たちも多くいる。自らイラク PKO 体験を持つある自衛隊幹部 OB 幹部がいた。兵士達の隊長であった彼は“今の日本国憲法の制約（専守防衛・武器使用の制約）のもとで部下たちを危険な場所に派遣することは心が痛い”と退官した。防人歌には見知らぬ地に戦いにゆく兵士の不安の心の叫びが集められている。防人たちの上官であった大伴家持の防人たちの悲別の歌にみる兵士たちへの愛情の歌も記されている。防人たちの心情と共に上官の心情を感じたいと思った。戦いのミッションがあり中間管理職役の中継ぎのジレンマをもつ上官たちの心情は、如何ばかりであろうか。

平和日本の下では通常の社会人は戦争に行くことはない。しかし、世界には解決困難な戦争の現実がある。隣の韓国では休戦中であるが、いざ有事のため兵役義務があり男子はある年齢に達すると約 2 年間の軍隊経験をさせられる。企業に勤務中でも休職して召集される。実戦は少ないものの演習でも死傷者は出る。兵役出発前、家族たちが集まり無事帰還を祈って食事をとる光景に接したことがあった。戦前日本の出陣前の親、家族たちが見送る儀式と似ていた。親たち、家族たちとの辛い別れがあった。現代日本では、徴兵はないが公のために生死をかけた危険な職業がいくつかある。自衛官、警察官、消防隊員、海上保安庁員、災難救助に関わる公務員等などである。安全が保障されていない PKO 活動員、国際ボランティアあるい福島原発事故処理員なども「現代の防人」たちであろう。肉体的な犠牲は少なく形態は異なるがビジネス戦士という広義の兵士もいる。家族を捨て企業や組織のために犠牲となるビジネス戦士は防人と似ている。経済立国日本では心をいためる余裕もないが、高度成長時期の企業内では家族第一を語ることは、非常識と語ることもできなかった時代があった。“仕事”というミッションのため単身赴任、酒、ゴルフ、麻雀という仕事上の付き合いに専心した父親の犠牲になった家族も多い。ブラック企業のパワハラに自殺や過労死するビジネス戦士もいる。多くを欧米に学んできた日本人であるが労働問題は軽視されてきた。見直し機運にあるが家族か組織かどちらが大事かについては、未だ欧米人の考えとは異なり個人が犠牲になることが多いようである。

古来、日本人は歌が好きである。現代日本人はカラオケが好きである。哀愁歌、恋歌、演歌、ポップスさまざまなジャンルで老若男女が歌いストレスを解消する姿は“現代の万葉歌”といえるかもしれない。歌謡曲もメロディなして歌詞のみじっくり詠むと素晴らしく心を打つものが多い。青春時代の抒情を思い出してくれる歌もある。意味のないリズムのみの歌や字余りの歌などもあるが若者たちは、ライブコンサートにストレスを解消しそれぞれの青春を謳歌している。人を惹きつける歌の呪力によるものだろうと思う。

閑話休題、大伴の家持は二つの顔をもった歌人であった。代表的な歌で比較してみる。一つ目は「大君は・・・」「海ゆかば・・・」で表す天皇を崇拝する武人・官人として国家防衛のために国の犠牲のなつて防人たちを鼓舞する軍人としての顔である。

もう一つの顔は

「うらうらに照れる春日にひばり上がり心悲しもひとりし思えば（巻 19 4292）
ひばりの声の響くそらに憂愁のところが一層深められる孤独の情を詠む歌がある。

あるいは

「わが園の李（すもも）の花か散るはだれのいまだ残りたるかも（巻19 4140）」

庭中に散る花を残雪にたとえ雪とスモモの白さを対比させた色彩感覚のみえる詩歌をつくる芸術的感性の持ち主の歌人の顔である。

戦後の民主主義教育のもとでは、国家社会主義に利用されたと悪評の高い家持の歌であったが、家持は、天皇崇拜者であるが、極右団体の思想でもないしファシズム思想でもない。家持が防人歌を選ぶにあたって、太平洋戦争中の軍部や共産主義国家の思想統制のように文学作品を検閲し処罰したわけでもない。人間同士の大らかな自由の関係があった。大化・奈良時代は、まだ国づくりができたばかりであり不安定な天皇の時代であった。臣として大君に尽くす素朴な心情と種々の事情で地方から召集された防人たちへの愛情や同情が心奥で複雑に昇華されていると評価したい。

本稿を書き終えた後、職務とはいえ家族と離れ危険作業に従事する「現代の防人」たちや家族等の和歌を集めてみたいと思った。現在日本は、「水と安全はタダの国」ではなくなっている。自ら思考することなく政府を非難したり政局ばかりの政治家たち安全ただ乗りで大衆迎合するマスメディア、したたかな国際社会の現実を目を向けない「平和幻想」「平和ぼけ」の人たちへの「異立て」をしてみたい。現在の平和が歴史の犠牲者のもとにあることを忘れてはならない。筆者は決して家持の時代のような神権政治理念による軍国主義的な「専制君主制国家」を望むものではない。しかし神話や和歌が日本人の心の底にあって遺伝子的役割を演じていることを忘れないようにしたいのである。

以上

(20180711SO)

卷末： 万葉集 防人歌全集

- 0329: やすみし我が大君の敷きませる国の中には都し思ほゆ(大伴四綱)
0330: 藤波の花は盛りになりけり奈良の都を思ほすや君(大伴四綱)
1265: 今年行く新防人が麻衣肩のまよひは誰れか取り見む(古歌集より)
1266: 大船を荒海に漕ぎ出でや船たけ我が見し子らがまみはしるしも(古歌集より)
3344: この月は君来まさむと大船の思ひ頼みていつしかと.....(長歌)(防人妻)
3345: 葦辺行く雁の翼を見るごとに君が帯ばしし投矢し思ほゆ(防人妻)
3427: 筑紫なるにほふ子ゆゑに陸奥の可刀利娘子の結ひし紐解く(不明)
3480: 大君の命畏み愛し妹が手枕離れ夜立ち来のかも(不明)
3516: 対馬の嶺は下雲あらなふ可牟の嶺にたなびく雲を見つつ偲はも(不明)
3567: 置きて行かば妹はま愛し持ちて行く梓の弓の弓束にもがも(不明)
3568: 後れ居て恋ひば苦しも朝獵の君が弓にもならましものを(不明)
3569: 防人に立ちし朝開の金戸出にたばなれ惜しみ泣きし子らはも(不明)
3570: 葦の葉に夕霧立ちて鴨が音の寒き夕し汝をば偲はむ(不明)
3571: 己妻を人の里に置きおほほしく見つつぞ来ぬるこの道の間(不明)
4321: 畏きや命被り明日ゆりや草がむた寝む妹なしにして(物部秋持)
4322: 我が妻はいたく恋ひらし飲む水に影さへ見えてよに忘れず(若倭部身麻呂)
4323: 時々花は咲けども何すれぞ母とふ花の咲き出来ずけむ(丈部真麻呂)
4324: 遠江志留波の磯と尔閑の浦と合ひてしあらば言も通はむ(丈部川相)
4325: 父母も花にもがもや草枕旅は行くとも捧ごて行かむ(丈部黒當)
4326: 父母が殿の後方のももよ草百代いでませ我が来るまで(生玉部足國)
4327: 我が妻も絵に描き取らむ暇もが旅行く我れは見つつ偲はむ(物部古麻呂)
4328: 大君の命畏み磯に触り海原渡る父母を置きて(丈部人麻呂)
4329: 八十国は難波に集ひ船かざり我がせむ日ろを見も人もがも(丹比部國足)
4330: 難波津に装ひ装ひて今日の日や出でて罷らむ見る母なしに(丸子多麻呂)
4331: 大君の遠の朝廷としらぬひ筑紫の国は敵守る.....(長歌)(大伴家持)
4332: 大夫の鞆取り負ひて出でて行けば別れを惜しみ嘆きけむ妻(大伴家持)
4333: 鶏が鳴く東壮士の妻別れ悲しくありけむ年の緒長み(大伴家持)
4334: 海原を遠く渡りて年経とも子らが結べる紐解くなゆめ(大伴家持)
4335: 今替る新防人が船出する海原の上に波なさきそね(大伴家持)
4336: 防人の堀江漕ぎ出る伊豆手船楫取る間なく恋は繁けむ(大伴家持)
4337: 水鳥の立ちの急ぎに父母に物言はず来にて今ぞ悔しき(有度部牛麻呂)
4338: 晷薦牟良自が磯の離磯の母を離れて行くが悲しき(生部道麻呂)
4339: 国廻るあとにかまけり行き廻り帰り来までに斎ひて待たね(刑部虫麻呂)
4340: 父母え斎ひて待たね筑紫なる水漬く白玉取りて来までに(川原虫麻呂)

- 4341: 橘の美衰利の里に父を置きて道の長道は行きかてのかも(丈部足麻呂)
4342: 真木柱ほめて造れる殿のごといませ母刀自面変はりせず(坂田部首麻呂)
4343: 我ろ旅は旅と思ほど家にして子持ち瘦すらむ我が妻愛しも(玉作部廣目)
4344: 忘らむて野行き山行き我れ来れど我が父母は忘れせのかも(商長首麻呂)
4345: 我妹子と二人我が見しうち寄する駿河の嶺らは恋しくめあるか(春日部麻呂)
4346: 父母が頭搔き撫で幸くあれて言ひし言葉ぜ忘れかねつる(丈部稲麻呂)
4347: 家にして恋ひつつあらずは汝が佩ける大刀になりても斎ひてしかも
(日下部三中父)
4348: たらちねの母を別れてまこと我れ旅の飯廬に安く寝むかも(日下部三中)
4349: 百隈の道は来にしをまたさらに八十島過ぎて別れか行かむ(刑部三野)
4350: 庭中の阿須波の神に小柴さし我れは斎はむ帰り来までに(若麻續部諸人)
4351: 旅衣八重着重ねて寐のれどもなほ肌寒し妹にしあらねば(玉作部國忍)
4352: 道の辺の茨のうれに延ほ豆のからまる君をはかれか行かむ(丈部鳥)
4353: 家風は日に日に吹けど我妹子が家言持ちて来る人もなし(丸子大歳)
4354: たちこもの立ちの騒きに相見てし妹が心は忘れせぬかも(丈部与呂麻呂)
4355: よそにのみ見てや渡らも難波渦雲居に見ゆる島ならなくに(丈部山代)
4356: 我が母の袖もち撫でて我がからに泣きし心を忘らえのかも(物部乎刀良)
4357: 葦垣の隈処に立ちて我妹子が袖もしほほに泣きしぞ思はゆ(刑部千國)
4358: 大君の命畏み出で来れば我の取り付きて言ひし子なはも(物部龍)
4359: 筑紫辺に舳向かる船のいつしかも仕へまつりて国に舳向かも(若麻續部羊)
4360: 皇祖の遠き御代にも押し照る難波の国に天の下.....(長歌)(大伴家持)
4361: 桜花今盛りなり難波の海押し照る宮に聞こしめすなへ(大伴家持)
4362: 海原のゆたけき見つつ葦が散る難波に年は経ぬべく思ほゆ(大伴家持)
4363: 難波津に御船下ろ据ゑ八十楫貫き今は漕ぎぬと妹に告げこそ(若舎人部廣足)
4364: 防人に立たむ騒きに家の妹がなるべきことを言はず来ぬかも(若舎人部廣足)
4365: 押し照るや難波の津ゆり船装ひ我れは漕ぎぬと妹に告げこそ(物部道足)
4366: 常陸指し行かむ雁もが我が恋を記して付けて妹に知らせむ(物部道足)
4367: 我が面の忘れもしだは筑波嶺を振り放け見つつ妹は偲はね(占部子龍)
4368: 久慈川は幸くあり待て潮船にま楫しじ貫き我は帰り来む(丸子部佐壯)
4369: 筑波嶺のさ百合の花の夜床にも愛しけ妹ぞ昼も愛しけ(大舎人部千文)
4370: 霰降り鹿島の神を祈りつつ皇御軍に我れは来にしを(大舎人部千文)
4371: 橘の下吹く風のかぐはしき筑波の山を恋ひずあらめかも(占部廣方)
4372: 足柄のみ坂給はり返り見ず我れは越え行く.....(長歌)(倭文部可良麻呂)
4373: 今日よりは返り見なくて大君の醜の御楯と出で立つ我れは(今奉部与曾布)
4374: 天地の神を祈りて獵矢貫き筑紫の島を指して行く我れは(大田部荒耳)
4375: 松の木の前みたる見れば家人の我れを見送ると立たりしところ(物部真嶋)

- 4376: 旅行きに行くとは知らず母父に言申さずて今ぞ悔しけ(川上老)
- 4377: 母刀自も玉にもがもや戴きてみづらの中に合へ巻かまくも(津守小黑栖)
- 4378: 月日やは過ぐは行けども母父が玉の姿は忘れせなふも(中臣部足國)
- 4379: 白波の寄そる浜辺に別れなばいともすべなみ八度袖振る(大舎人部祢麻呂)
- 4380: 難波津を漕ぎ出て見れば神さぶる生駒高嶺に雲ぞたなびく(大田部三成)
- 4381: 国々の防人集ひ船乗りて別るを見ればいともすべなし(神麻績部嶋麻呂)
- 4382: ふたほがみ悪しけ人なりあたゆまひ我がする時に防人にさす(大伴部廣成)
- 4383: 津の国の海の渚に船装ひ立し出も時に母が目もがも(丈部足人)
- 4384: 暁のかはたれ時に島蔭を漕ぎ去し船のたづき知らずも(他田日奉得大理)
- 4385: 行こ先に波なとゑらひ後方には子をと妻をと置きてとも来ぬ(私部石嶋)
- 4386: 我が門の五本柳いつもいつも母が恋すす業りましつしも(矢作部真長)
- 4387: 千葉の野の児手柏のほほまれどあやに愛しみ置きて誰が来ぬ(大田部足人)
- 4388: 旅とへど真旅になりぬ家の妹が着せし衣に垢付きにかり(占部虫麻呂)
- 4389: 潮舟の舳越そ白波にはしくも負ふせたまほか思はへなくに(丈部大麻呂)
- 4390: 群玉の枢にくぎさし堅めとし妹が心は動くなめかも(刑部志可麻呂)
- 4391: 国々の社の神に幣奉り贖乞ひすなむ妹が愛しさ(忍海部五百麻呂)
- 4392: 天地のいづれの神を祈らばか愛し母にまた言とはむ(大伴部麻与佐)
- 4393: 大君の命にされば父母を斎瓮と置きて参み出来にしを(雀部廣嶋)
- 4394: 大君の命畏み弓の共さ寝かわたらむ長けこの夜を(大伴部子羊)
- 4398: 大君の命畏み妻別れ悲しくはあれど大夫の.....(長歌)(大伴家持)
- 4399: 海原に霞たなびき鶴が音の悲しき宵は国辺し思ほゆ(大伴家持)
- 4400: 家思ふと寐を寝ず居れば鶴が鳴く葦辺も見えず春の霞に(大伴家持)
- 4401: 唐衣裾に取り付き泣く子らを置きてぞ来のや母なしにして(他田舎人大嶋)
- 4402: ちはやぶる神の御坂に幣奉り斎ふ命は母父がため(神人部子忍男)
- 4403: 大君の命畏み青雲のとのびく山を越よて来ぬかむ(小長谷部笠麻呂)
- 4404: 難波道を行きて来までと我妹子が付けし紐が緒絶えにけるかも(上毛野牛甘)
- 4405: 我が妹子が偲ひにせよと付けし紐糸になるとも我は解かじとよ(朝倉益人)
- 4406: 我が家ろに行かも人もが草枕旅は苦しと告げ遣らまくも(大伴部節麻呂)
- 4407: ひな曇り碓氷の坂を越えしだに妹が恋しく忘らえぬかも(他田部子磐前)
- 4408: 大君の任けのまにまに島守に我が立ち来れば.....(長歌)(大伴家持)
- 4409: 家人の斎へにかあらむ平けく船出はしぬと親に申さね(大伴家持)
- 4410: み空行く雲も使と人は言へど家づと遣らむたづき知らずも(大伴家持)
- 4411: 家づとに貝ぞ拾へる浜波はいやしくしくに高く寄すれど(大伴家持)
- 4412: 島蔭に我が船泊てて告げ遣らむ使を無みや恋ひつつ行かむ(大伴家持)
- 4413: 枕太刀腰に取り佩きま愛しき背ろが罷き来む月の知らなく(桧前舎人石前妻:大伴部真足女)

- 4414: 大君の命畏み愛しけ真子が手離り島伝ひ行く(大伴部小歳)
- 4415: 白玉を手に取り持して見るのすも家なる妹をまた見てももや(物部歳徳)
- 4416: 草枕旅行く背なが丸寝せば家なる我れは紐解かず寝む(妻棕椅部刀自賣)
- 4417: 赤駒を山野にはがし捕りかにて多摩の横山徒歩ゆか遣らむ(棕椅部荒虫妻:宇遅部黒女)
- 4418: わが門の片山椿まこと汝れ我が手触れな土に落ちもかも(物部廣足)
- 4419: 家ろには葦火焚けども住みよけを筑紫に至りて恋しけ思はも(物部真根)
- 4420: 草枕旅の丸寝の紐絶えば我が手と付けろこれの針持し(棕椅部弟女)
- 4421: 我が行きの息づくしかば足柄の峰延ほ雲を見とと偲はね(服部於由)
- 4422: 我が背なを筑紫へ遣りて愛しみ帯は解かなあやにかも寝も(妻服部咎女)
- 4423: 足柄の御坂に立して袖振らば家なる妹はさやに見もかも(藤原部等母麻呂)
- 4424: 色深く背なが衣は染めましをみ坂給らばまさやかに見む(妻物部刀自賣)
- 4425: 防人に行くは誰が背と問ふ人を見るが羨しさ物思ひもせず(不明)
- 4426: 天地の神に幣置き斎ひつづいませ我が背な我れをし思はば(不明)
- 4427: 家の妹ろ我を偲ふらし真結ひに結ひし紐の解くらく思へば(不明)
- 4428: 我が背なを筑紫は遣りて愛しみえひは解かなあやにかも寝む(不明)
- 4429: 馬屋なる縄立つ駒の後るがへ妹が言ひしを置きて悲しも(不明)
- 4430: 荒し男のいをさ手挟み向ひ立ちかなるましづみ出でてと我が来る(不明)
- 4431: 小竹が葉のさやく霜夜に七重かる衣に増せる子ろが肌はも(不明)
- 4432: 障へなへぬ命にあれば愛し妹が手枕離れあやに悲しも(不明)
- 4433: 朝な朝な上がるひばりになりてしか都に行きて早帰り来む(安倍沙美麻呂)
- 4434: ひばり上がる春へとさやになりぬれば都も見えず霞たなびく(大伴家持)
- 4435: ふふめりし花の初めに來し我れや散りなむ後に都へ行かむ(大伴家持)
- 4436: 闇の夜の行く先知らず行く我れをいつ来まさむと問ひし子らはも(不明)

<http://www6.airnet.ne.jp/manyo/main/sakimori/index.html>

参考文献

1. 放送大学テキスト「古事記と萬葉集」
2. 安田與重郎「萬葉集の精神」新学社
3. 「逆説の日本史 3 古代言霊編」井沢元彦 小学館文庫 P270 P281P308P340 ほか
3. <https://blogs.yahoo.co.jp/kairouwait08/28045329.html>
4. <https://ja.wikipedia.org/wiki/防人>
5. <https://kotobank.jp/word/防人歌>
6. <https://ameblo.jp/dentou-hosyu/entry-12223282735.html>
7. 高岡市万葉歴史館 HP :
<http://www.manreki.com/arekore/yaka-manyou/yaka-manyou.htm>
8. <https://ameblo.jp/jkkwf703/entry-12180972393.html>
9. 「神社のいろは」扶桑社 88P、84P
- 1 0. <https://ameblo.jp/dentou-hosyu/entry-12223282735.html>
- 1 1. 「文学・芸術・文化」 2 巻 2 号 1990. 12 「大伴家持の「防人歌」」村瀬
- 1 2. 「祝詞入門」小野迪夫 P308 逆説の日本史 3
- 1 3. 「国民の歴史（上）」西尾幹二 文春文庫 P167
- 1 4 放送大学テキスト「音楽・情報・脳」仁科エミ P196
- 1 5 WIKI 和歌
- 1 6 「藤原氏の悪行」（関裕二）講談社
- 1 8. WIKI 防人歌
- 1 7. 防人歌 <http://www6.airnet.ne.jp/manyu/main/sakimori/index.html>
- 1 8. 「神話と日本人の心」（岩波現代文庫）河合 隼雄
- 1 9. 国体論一菊と星条旗 白井聡